

知的障害児を対象とした自発的な書字を促すための 協同描画場面の活用に関する事例的研究

高橋 玲

I. 問題

知的障害児の中には、文字そのものが書けるようになっていても、自発的な書字がほとんど見られない子どもが存在している。知的障害児は思考活動に即応して言語（内言）を自発的に作動しにくいこと、動機づけが低いことなどが示唆されており、文字で表現するといった高次な表現手段の活用には困難を示す場合も多い。知的障害児の自発的な書字を促すためには、書字の活用につながるような能力や内面を育てることが出来る活動を通して支援をすることが望ましいと考える。そこで、描画に着目することにした。描画は文字による表現よりも早く出現する。知的障害児の特性を踏まえると、頭の中で思い描いている内容を描画から表現していくほうが内言を作動させやすいと考える。描画のような表現活動は、書字に必要な基礎的な能力を習得したり（大庭他、1998）、コミュニケーション手段としての書字の役割を認識したり（大庭他、2000）するための活動であることが示唆されている。

知的障害児を対象として自発的な書字を促すために描画を活用した支援の実践的研究は少ない。子どもは大人との協同場面にいるとき、見よう見まねで書くといった擬似的な書字を展開することから、知的障害児に対して、自発的な書字を促すために協同描画場面を活用した支援を行い、その活用方法について検討することにした。

II. 目的

本研究では書字の獲得期にあり自発的な書字がほとんど見られない知的障害児一事例を対象として、自発的な書字を促すために協同描画場面を活用した支援を実施し以下の点を検討した。

1. 協同描画場面を活用するための支援方法
2. 協同描画場面を活用した支援における支援者のかかわり方

III. 方法

1. 対象児

小学校特殊学級に在籍する 5 年生男児（研究開始時）で、知的障害を有していた。会話によるコミュニケーションは可能で平仮名、片仮名はほぼ読み書きができ書字への興味が高まっていた。事前に保護者から研究協力の同意を得た。

2. 実施期間

2004 年 11 月～2005 年 12 月まで、計 12 回、1 回につき約 30 分間の描画活動を行った。

3. 支援場面の概要

支援者と協同で描画活動を行いともに書く場を作り上げていった。また支援者や対象児の保護者と文字によるやりとりができるようにした。

1)描画内容

対象児が日常生活に関連したことを選定し、ストーリーを設定した。たとえば買物に行く、小学校に行く、工事や事故に遭遇するなどを設定した。

2)支援場面の流れと書字の導入場面

- | | |
|--------------|---------|
| ①描画活動の準備をする。 | } 描画活動中 |
| ②描画活動を始める。 | |

支援者と対象児が登場人物になり、支援者とやりとりをしながらストーリーを展開している際に、道路や標識、看板などに文字を書いたり、家やお店、人物など描画の周りに文字を書いたりして伝え合う。

- | | |
|-----------------|---------|
| ③日付と描画内容について書く。 | } 描画活動後 |
| ④保護者に描画を見せる。 | |

日付と描画内容について文章を書き、保護者に伝える。

3)支援者のかかわり方

川村（2002）が発案した「内発的動機づけ支援方略尺度（改訂版）」参考に、書字に対して「交流感」「有能感」「自己決定感」をもつことができるような内発的動機づけを促すかかわり方をした。

IV. 結果

1. 1～2回目（描画活動導入期）の結果

1回目の描画を図1に示す。この時期は、対象児とやりとりをしながら描画活動を行うことに慣れるようにした。支援者の書く姿を見せたり、対象児の質問や要求に対して支援者はすぐに応じたりと、支援者が主となって活動した。ストーリーを展開している際に、道路や標識、建物などに対し、対象児は「何て書いてあるの？」と質問してきた。支援者がそれに応じて書いて見せるとその様子を見たり、読んだり、文字を指したりする姿が見られた。対象児自ら紙面にペンを向けて何かを書こうとしたり、書いた文字の上に重ねて線や数字を書いたりする姿（図中矢印）が見られた。

2. 3～5回目（自発書字発現期）の結果

5回目の描画を図2に示す。この期から描画活動後の描画内容を書く活動も取り入れた。

描画活動中は、対象児が何かを書こうとしていた場面（標識や建物など）を取り入れながらストーリーを展開していくようにした。対象児の発語や、やりとりに関連したことを書くようにした。対象児自ら文字のようなものを書いて伝えてくる姿が見られ、4、5回目では、買物へ行く、小学校へ行くなどのストーリーを展開させながら、値段や時刻、時間割など文字や数字を書いて伝える姿（図中矢印）が見られた。

描画活動後は、「どんな絵を描いたか？」と対象児に質問して発語を文章にして書くようにした。支援者の書字に興味を示すときと示さないときがあった。

3. 6～12回目（自発書字展開期）の結果

12回目の描画と描画内容を図3、4に示す。描画活動中は、対象児が書いた場合、支援者はうなずいたり、読んだり、文字を書いたりして、伝わっていることを返すようにした。ストーリーを展開しているとき、描画では表現できない内容をつぶやいたり、質問をしたりした。対象児が主となって活動をするようになり、テレビを見る、演奏を聴きに行くなどのストーリーを展開させなが

ら、時刻やテレビ番組名・キャラクター名、演奏曲などを書いて伝えたり、支援者のつぶやきや問いかけに対して書いて答えたりする姿（図中矢印）が見られた。

描画活動後は、保護者に何の絵を描いたのかを問かけるクイズを出し、答えを伝えるために書くことにした。6、9、11、12回目では自ら書く姿が見られた。

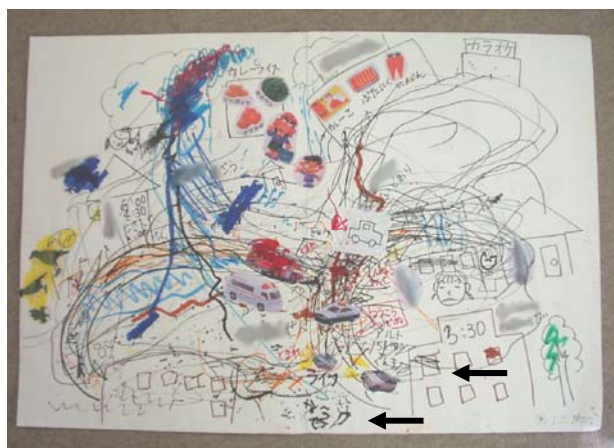


図1 1回目の描画



図2 5回目の描画

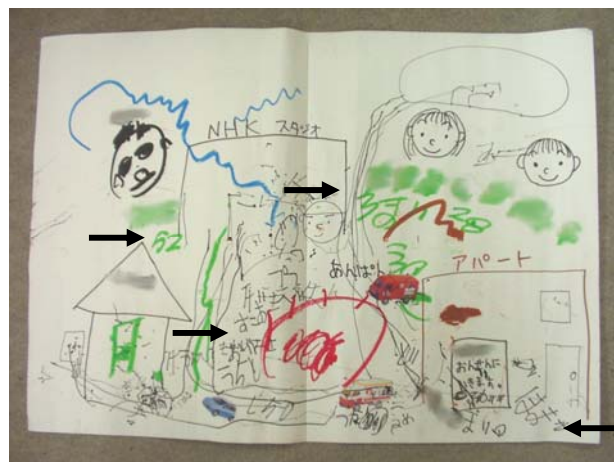


図3 12回目の描画

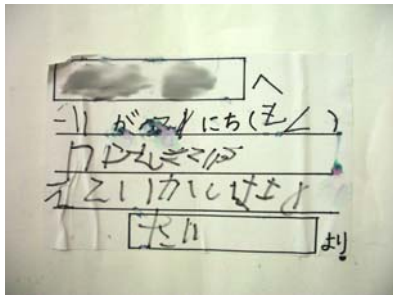


図4 12回目に書いた描画内容

V. 考察

1. 協同描画場面を活用するための支援方法

<協同描画場面の設定>

1) 書字の導入場面

描画の周りに文字を書き込んだり（描画活動中）、描画内容について文章を書いたり（描画活動後）と、2場面に書字を導入した。

描画活動中、対象児は自分が思い描いている内容を描画で描いていくことに加えて文字を書き込むことで、その内容がより明確になることを知り自然に書字に入ることができた。描画活動後は、描画で表出させてからその描画内容についての文章で書くことで、無理なく書字に入ることができた。内言が作動しやすくなり、自発的な書字へとつなげることができたと考える。

2) 擬似的な書字を展開する場面の設定

書字の展開ができるよう協同で描画活動を行った。支援者は対象児に書字のモデルを提示したり、対象児の気持ちを汲みとって代わりに書いたり、擬似的な書字に対して意味を返したりして、ともに書く場を作ることができた。対象児は支援者の書字に興味を示し、まねて文字のようなものや文字を書くようになり、書く場に入り込んでいった。書きを使用することへの肯定的な評価を高め、自発的に書字をするようになったと考える。協同で書く場を作り上げてくれる大人は重要な役割を果たすといえる。支援者は書く場を作り上げているとき、対象児が読み書きできる文字を提示したり、対象児自ら書くことができるような場面を意図的に取り入れたりした。意図をもった大人との協同場面の中で支援をしていくことが必要であるといえる。

3) 伝え合う場面の設定

書字の導入場面では、文字によるやりとりができるようにした。やりとりを重ねるうちに伝えるために書くという機能的意味を明確にし、自発的に書字をするようになったと考える。自発的な書字を促すためには、子ども自身が機能的意味を理解する必要がある。文字で伝え合う場で高まっていくといえる。やりとりをしているとき、対象児は文字のようなものや誤字を書いて伝えてくることがあった。それに対して、支援者も保護者も伝わったという肯定的な反応を繰り返し、やりとりが成立するように対応した。文字によるコミュニケーションを成立させてくれる大人の存在が必要であるといえる。

2. 協同描画場面を活用した支援における支援者のかかわり方

書字に対する内発的動機づけを促すかかわり方をした。対象児が表現してくる内容をできるだけ受容し、支援者とのやりとりを通して、「交流感」を充足させた。対象児の書く様子が見られた場合は、うなずいたり、読んだりと称賛して、「有能感」を充足させた。自分が活動の主体者であることが自覚できるよう、描画内容は対象児が表現したいものにし、書字の強制をしないで「自己決定感」を充足させた。これらの充足によって、自ら書こうという意欲を喚起させて書字をするようになったと考える。

VI. 今後の課題

本研究で、協同の相手として大人が重要な役割をもつことが確認された。協同の相手として友達やきょうだいなど子どもも考えられる。大人と子どもでは、役割としてどのような違いがあるのか検討する必要がある。

文献

- 川村秀忠（2002）学習障害児の内発的動機づけ：その支援方略を求めて．東北大学出版会．
大庭重治・菅原肇・中村万希・菊地克行・高橋幹則・伊藤まゆ・木下建作・浜辺清・細谷一博（1998）片眼弱視児に対する表現活動の初期指導過程．上越教育大学障害児教育実践センター紀要，4，25-31．
大庭重治・西田正信・羽賀一代・細谷一博・辻尾壽市・菅原淳（2000）コミュニケーションにおける文字の活用に関する実践的検討の試み：小学校低学年のMちゃんとSちゃんによる文通の記録．上越教育大学障害児教育実践センター紀要，6，1-7．